

復興の希望を胸に

「ままでいい着」を

仮設住宅で暮らす女性たちに
生きがいと生活の糧をもたらす



の
佐野 ハツノ氏

いいたてカーネーションの会代表

略歴 福島県飯舘村出身。平成元年、村内女性対象の海外派遣「若妻の翼」事業の一期生として、ヨーロッパ研修に参加。同8年から村の農業委員をつとめ、同14年に全国で女性初の農業委員会会長に就任。平成18年より、農家民宿「ままでいい着」を運営。東日本大震災後、避難先の仮設住宅の管理人として、住民の健康管理や交流促進に取り組む。現在、「ままでいい着」の製作・販売活動を通じて、女性の生きがいと雇用創出に取り組んでいる。



いいたてカーネーションの会

震災後、飯舘村の住民が避難した仮設住宅で、佐野氏が、入居者の交流と趣味の活動づくりのため、裁縫が得意な高齢女性に講師になってもらい裁縫教室を開くことを提案し、平成23年10月に発足。現在、高齢女性を中心に約20人が参加している。全国から寄贈された古着を村の伝統的な「ままでいい着」に仕立て直し、販売している。



年表

40歳
「若妻の翼」事業に一期生として、10日間のドイツ研修に参加


47歳
飯舘村の農業委員に就任

53歳
女性として、全国で初めて農業委員会会長に就任

58歳
農家民宿「ままでいい着 どうげ」を始める

62歳
東日本大震災発生。ふるさとの飯舘村を離れ、福島市の松川工業団地第一仮設住宅へ避難し、住民約110戸の管理人に就任。いいたてカーネーションの会設立

63歳
平成24年度(第9回)女性のチャレンジ賞特別部門賞(防災・復興)受賞



「若妻の翼」事業で
芽生えたふるさとへの思い

私が生まれた福島県飯舘村は、決して裕福な村ではなく、貧しい中で、先祖が苦勞して村を築いてきました。そのため、村には、苦しい時には皆で助け合うという精神が育まれていました。

平成元年、農繁期の9月に農家の嫁を、ヨーロッパへ約10日間派遣する「若妻の翼」事業が村で立ち上がりました。「女が変わって、男が変わり、そして村が変わる」というキャッチフレーズのもと、女性も視野を広く持つために考えられた研修旅行です。けれど、一年で一番忙しい時期に、農家の嫁が家を空けるのですから、参加したいと言うのは大変な勇気がいりました。区長さんが薦めてくれ、夫と姑も、「今までがんばったんだから行っておいで」と言ってくれましたが、周囲からは「忙しい時期にたいしたもんだ」という皮肉もきこえてきました。

「若妻の翼」に参加する前、私は農家の嫁は、朝から晩まで仕事ばかり、どこにも行けなくて辛いなと思っていました。そんなところに、誰もお嫁に來たいとは思いませんよね。

研修先の西ドイツでは、現地の女性との交流会や、女性のための駆け込み寺など様々なところを視察しました。そこで、自分の生き方に誇りを持ち、自分自身で問題解決に取り組む女性の姿に、大変感銘を受けました。自分の生き方ひとつで、地域で豊かな暮らしをつくることができるということに気付いたのです。それまで、農家の嫁は

らずつとやりたかったグリーンツーリズムに取り組みするため、自宅で農家民宿を始めました。都会から来る人に、特別贅沢なものを出さないけれど、村の自然の恵みを感じられる宿を目指しました。そして、ようやく民宿の経営が軌道に乗った頃、東日本大震災が発生しました。

「ままでいい着」の製作を通じて、
女性たちに生きがいと希望を

震災後、村は全村避難となり、生活は一変しました。私が避難し、管理人になった松川工業団地第一仮設住宅は、約110世帯の半数近くが高齢者の一人暮らしでした。村にいた頃は、皆畑の手入れなどで忙しくしていましたが、仮設住宅では何もすることがありません。そこで、農作業ならできたらうと畑を借りましたが、遠くて移動の足がなかったり、高齢のため機械が使えなかったりで、うまくいきませんでした。家にこもりつきりにならないよう、芋煮会などで交流の場をつくりましたが、避難生活の中で体調を崩したり、認知症になったり、病気になる人が増えていました。

そんな中、毎日部屋で泣きじやくつているおばあさんがいました。私は毎日通って声かけをし、ある日とうとう根負けして出てきてくれました。その時着ていたのが、古着を仕立て直して縫った、上下に分かれた作業衣のような服でした。そこで、「あら、ずいぶん素敵な着物じゃないの。その縫い方、みんなに教えてくれない？」と頼みました。そうして裁縫教室の声かけをしたところ、

自分の意見を言うことは控えないといけないと思っていましたし、農業も指示されて動くという受け身でした。そうではなく、主張するべきことは主張し、周りの環境を変えていく、そうして皆で変わっていく、より良い村になる、そんなふうに見えるようになりました。

女性で全国初の
農業委員会会長に就任
「役割が人を成長させる」

帰国後はコンサートの開催に取り組みんだり、農業でも部門経営者として、経営に参画するようになりました。そうしていると、自然と周りが評価してくれるようになり、平成8年、村の農業委員にお声がかかりました。この時、議員の中に「女を出したら笑われる」と言う人がいたほど、農業の意思決定の場は男社会でした。また、上の世代の女性から強い風当たりもありましたが、同世代の女性たちは「あなたが目標になるから、私たちをひっぱって」と励ましてくれました。私は、「女ではダメだったと言われないよう、一生懸命勉強し、努力しました。」

平成14年、今度は農業委員会の会長にこの話をいただきました。この時も周りの反応は同じようなものでした。選挙の結果、もう一人の男性候補者と1票差で私に決まりました。飯舘村の農業の将来をどうするか、農業委員会をいかに活性化するか考え、一生懸命取り組みました。振り返ってみると、与えられた役割が、自分を成長させてくれたと思います。

平成18年、「若妻の翼」に行った時か

また、ただ古着を縫うだけではなく、販売してはどうかと思い、売ってくれるお店もあちこち探しました。ようやく震災から1年後、首都圏のデパートで販売会を開けることになり、この着物を「ままでいい着」と命名しました。「ままでいい着」とは、手間ひまを惜しまず、丁寧に、じっくりと、つましく、という意味の福島方言です。物を大切に、一針一針丁寧に縫って再生させる、そんな思いを名前に込めました。販売会では、持って行った「ままでいい着」が全て売れました。多くの女性にとって、夫ではなく、自分名義の収入が入るといのは初めての経験で、とても貴重なものでした。そして、気がつくとも最初の頃はつらい思いを抱えていたおばあさんたちが、ずいぶん元気になっていました。これらの活動は、支えてくれたボランティアの方々がいってこそ実現したもので、感謝の思いは言葉にし尽くせません。

今後について、この会の活動を続け、いずれ飯舘村に戻るようになった時、針仕事が生計の糧になることが目標です。苦勞もありますが、たくさんの方にいただいた応援へのお返しは、私たちが元気であること、活動を継続し、村の復興の一助になることと思っています。いつか村に戻り、先祖が苦勞して築いた村を子孫につなげたい。「ままでいい着」の製作は、村の復興という希望に向けた、大切な一歩になっています。

(文・尾島有美)